

## 大石始著『盆踊りの戦後史 「ふるさと」の喪失と創造』

弓削田 綾 乃

本書は、文化財に指定されているような歴史ある盆踊りではなく、これまでほとんど対象とされてこなかった「歴史的な厚みや伝統文化としての風格とは無縁」な盆踊りの意義を追求するものである。その根底にあるのは、盆踊りを実践してきた著者自身の豊富な体験であろう。著者はこれまで、民俗芸能や民俗行事を含めた多種多様な空間に身を置いてきた。日本の過去から現在、そして未来をも俯瞰する広い視野と見識は、身体の記憶から生まれてきたものなのだろう。

盆踊りに関する複数の著述を発表してきた著者が本書で注目するのは、先述のとおり、「歴史的な厚みや伝統文化としての風格とは無縁」な盆踊りである。著者は、そうした盆踊りにもなんらかの役割があったはずと考え、1945年から2020年までの（実際には1945年以前も含む）約75年間もの歴史を、膨大な資料と現地調査をもとに、丹念に辿った。そのテーマは、「盆踊りは社会のなかでどのような意義を持ち、どのように社会を変えてきたのか」と「地域コミュニティーの在り方が激変している現在、盆踊りがどのような力を持ち得るのか」の2点である。

本の構成は、第1章から終章までの7つの章で成り立ち、各章は年号または年代で区切られる。

第1章は、明治から昭和初期、第二次世界大戦までの日本の近代化の時代で、盆踊りが禁じられたのちに復活する経緯が書かれている。

第2章は、昭和20～30年代の戦後復興期、盆踊りの再生の時代で、戦時中に中断されていた盆踊りが、戦後、各地で復興した状況が克明に描写される。

第3章は、昭和30～40年代の高度経済成長期である。ここでカギとなる言葉は「故郷の喪失」だろう。

第4章は、昭和50年代であり、1973年の原油価格高騰により世界経済が混乱し、日本も不景気の時代に突入した頃の、団塊ジュニア世代に焦点をあてている。

第5章は、昭和60年代から平成初期の、バブル最盛期から崩壊後までである。ここでも盆踊りは見事に社会変動に帯同していた。

第6章では、平成後期から現在を辿る。この年代の最も大きな社会変動は、言うまでもなく東日本大震災であった。

そして終章は、「アフター・コロナ時代の盆踊り」というメインテーマで、これからの盆踊りの意義

について考えている。

以上が本書における時代区分である。これだけでも、盆踊りが時代とともに変遷してきたことが理解できよう。通時的な変遷の詳細については、ぜひ本書を読んでほしい。本稿では、本書のテーマに即した四つの事象についてみていくことにする。

一つ目が、副題にもなっている「ふるさと」の“喪失”である。もちろん、「故郷」が物理的になくなるわけではない。この表現が意図するのは、地方から都市へ移動した多くの者に、「故郷＝心の支え」という構図があてはまらなくなったということである。心の支えの喪失こそが、新たな盆踊り空間の再構築に一役買ったという。物事の再構築には、多方面からの膨大なパワーが必要だ。著者が“喪失”という強い言葉を用いたのは、その後の再構築がどれほど劇的で、社会的影響が大きかったかを訴えたかったからではないだろうか。

再構築の例として、神奈川県川崎市のふるさと大師盆踊り、神奈川県横浜市のおふるさと港北秋まつり、大阪府大阪市西成区のお盆まつり、そして各地の大工場での盆踊りと団地での盆踊りが紹介されている（第3章）。これ以前の盆踊りは、どちらかという足並みがそろっていたが、この頃から、盆踊りの分化、多様化が進んでいった。まさに著者がいう「盆踊りの変革は高度経済成長期におけるライフスタイルや思考・価値観の変化ともリンクしている」時代だったのだ。新たなコミュニティーが生まれるがゆえに、「故郷の喪失」が起き、「自分たちが地域社会の一員であるという意識を育むため」「神話としての故郷」を胸の内に育むために、盆踊りが必要とされたのである。

二つ目は、コミュニティーの“創造”についてである。第4章で著者は、この時代に地方へ眼差しが向き、環境や人間性を主題とする広告・CMが目立ち始めたことを説明する。次いで、東京都の多摩ニュータウンと大阪府の千里ニュータウンという東西のニュータウンの盆踊りに注目した。

多摩ニュータウンの盆踊りは、旧住民と新住民の融和をはかる目的があった。また、人工都市ならではの新たな表現の可能性を探る試みも行われており、パルテノン多摩のような「新たな祝祭空間」が生み出されたことも、盆踊りに影響した。

もう一方の千里ニュータウンの記述で目を引いたのは、「DIY精神」という言葉だ。住民らが盆踊りや夏祭りを自力で立ち上げることで、地域

との結びつきを構築した点は、まさに「DIY精神」の賜物だろう。また、キッズ・ダンスや和太鼓等を組み合わせた総合的イベントへと様変わりしていく様子を、「リノベーション」と表現しているのも、言い得て妙だろう。

また第5章では、東京都西神田を取り上げている。当地は、かつて出版・製本の工場の町として賑わっていたが、バブル期にオフィス街へ様変わりしたことで、コミュニティーの活力が失われていった。しかし区営住宅の設置で住民が若干増加し、夏祭り・盆踊りが再開された。当時のコミュニティーには、住人だけでなく、地域に働きに来ている人も半分近くおり、多種多様な人々をつなぐ役割を担ったのが、盆踊りだったというわけである。このことを著者は、「コミュニティーを再生するものであると同時に、再編するためのものでもあった」と指摘した。

以上の三者三様の事例は、いずれも「ふるさと」と「コミュニティー」、「喪失」と「創造」という二面性かつ連続性を帯び、盆踊りがそれらをつなぐ要であったことを雄弁に物語る。

三つ目として着目するのが、盆踊りの曲目である。本書を読み進めると、「東京音頭」から始まる多様な盆踊り曲そのものが、時代を色濃く映してきたことに気づかされる。

特に印象的だったのは、第4章で紹介されたアニソンや歌謡曲の音頭である。これらへの支持こそが、目的も形態も「何でもあり」に進んだ盆踊りの要因だとしているのだ。アニソンなどは、「東京音頭」のような一流の専門家たちに創られたものに比べて、粗雑さが目立つにもかかわらず、団塊ジュニア世代にとっては、いまや原風景であるという指摘は興味深い。

また、自由になった盆踊りを象徴する曲として、「バハマ・ママ」（ドイツのディスコ・グループが1979年にリリースしたダンス・ソングをもとに、1980年代に関東地方で盆踊りとして使用）が紹介されている。和風でも音頭調でもない楽曲が突如盆踊りに持ち込まれ、30年後には紛れもない「伝統」となった。まさに「文化の創造」であり、この曲の発信方法がインターネットであったことも、時代を象徴しているだろう。

第5章では、「ダンシング・ヒーロー」とYOSAKOIも取り上げられている。「ダンシング・ヒーロー」は、リリースされて随分たってから、盆踊りになった。懐メロが盆踊りでよみがえったかのような現象だったが、著者は、「21世紀から見ると、バブルの時代も「東京音頭」が発売された昭和初期も等しく「過去」である」という。そして、伝統と創作のシャッフルによって、新しいものが生まれた、いわば盆踊りの現代的なあり方の象徴だと述べるのだ。

四つ目として、現在進行形ともいえる社会変動と盆踊り、それを踏まえた提言に着目したい。著者は、震災後に変化した「消費から体験へ／モノ消費からコト消費へ」という風潮、ライブ興行の重視などが、本来の盆踊りのスタイルに合致したことを検証した。例として、2012年のプロジェクトFUKUSHIMA!の納涼盆踊りが紹介されている。これは、福島県にゆかりのあるアーティストらが立ちあげたもので、それまでと違うのは、地縁集団を超えた広がりを見せたことであった。誰でも踊りの輪に入れば、そこが地元になる。それは、「地元」の再構築であり、まさに「ふるさと創造」であった。

また、盆踊りの新しいスタイルも登場する。ダンスカンパニーとの協働、クラウドファンディングの利用、ライブ配信、大学との連携、YouTube・SNSによる情報共有・発信などである。

なお、被災地の人々が民俗芸能に託す深い思いや、多国籍の人々がルーツを超えた場をつくるための課題などにも言及している。これらは、盆踊りに、まだ残された役割があることを示唆するものだ。そこで著者が提示したのが、「さまざまな縁を結び直す場」「持続可能な交流のネットワークの形成」「地元に残るといふ選択肢の醸成」、そして「死者と生者の交流の場」である。このように書き連ねると、これらはすべて盆踊りの原点に通じていることに気づく。だからこそ、現代の大きな課題である共生社会、持続可能な社会に向けてのヒントが、盆踊りにはあるように思えてならないのだ。

本書のスタートである戦後の盆踊りを今一度振り返ると、その目的は戦没者の供養、暗いムードの払拭であり、再生の象徴でもあった。1945年8月15日の終戦の夜、岐阜県の郡上踊りの地では、住民が自然と集まり、踊ったという。著者は「踊りの輪に渦巻く感情は決して単純なものではなかっただろう」と思いを寄せた。これは、自然災害や感染症に苦しむ現代の姿にも重なる。本書を通して、盆踊りの普遍的な意義を知ると同時に、盆踊りを介して社会変動と人々の思いを深く知ることが可能だということが証明されたのではないだろうか。

2020年夏、オンライン盆踊りを続けた著者は、「盆踊りの場とは、そもそも音頭と踊りだけで構成されているわけではない」と最後に記した。「僕は～」という一人称のやわらかな語り口の本書は、盆踊りを愛してやまない知人の話を聞いているような親しみやすさがあり、読後は実際に足を運び、踊りたくなる。そんな魅力をそなえた一冊である。（筑摩書房、2020年12月刊行）